さらに拡大するLTOの役割

LTOは映像プロダクションにおいて、大量の映像・音声データをコンパクトな筐体に記録し、安全に保存できるアーカイブメディアとして大きな位置を占めている。現在中心となるのは7世代目の「LTO7」や8世代目の「LTO8」。編集に使った撮影素材やプロジェクトデータ、完成データ、CG・VFXデータを保存するほか、外部企業と大容量データをやり取りする際にも使われる。インタフェースとして映像制作用のデータマネジメントツールを使い、さらなる効率化を図っている企業もある。

映像プロダクション

松竹映像センター

フィルムのスキャンデータ保存に活用

松竹映像センター（東京都港区）はLTOを活用する企業の1社で、約5年前から導入している。

メディアコーディネイト部の宮本忠部長は「当社は現在、主に3つの用途でLTOを使用している」と話す。1つは、親会社である松竹の映画やテレビ作品のオリジナルネガ、マスターポジといったフィルムをスキャンして、LTOにデータを保存するプロジェクトであり、複数メーカーと協力しながら進めている。

またデジタルで制作された新作映画は、各種データがその工程でさまざまな場所に分散することがあるので、それもLTOに保存する。社内データをサーバーから退避させ保管するのにも利用している。

同社がLTOを採用したのは、映画作品のデータをテープ1本に安全に収めることができるため。「フィルムのスキャンデータをどのように保管すべきか検討するなかで、大容量データの記録が可能なLTOが候補となった」（井上直樹アーカイブグループ長）という。

LTOの特徴の1つはHDDよりも記録容量が大きいことにある。LTO7世代目の場合、非圧縮データで6・0テラバイト、圧縮データだと15テラバイトの記録容量を持つ。8世代目では非圧縮で12テラバイト、圧縮だと32テラバイトの記録が可能だ。

松竹映像センターはフィルムのスキャンデータなどを保存する

同社はフィルムを4Kでスキャンするため、データは必然的に大規模化する。そのため記録容量の大きいLTOは、管理上あるいは、保管スペースの都合上、利点が大きいという。

またLTOは駆動部品を持たないため、通電せずに保存しても破損リスクが低い。ネットワークから遮断された形で保存するため、サイバー攻撃を受ける恐れも低くなる。同社グループにとって映像データは貴重な資産であり、安全性の担保も最大限に考慮すべき要素だった。

同社では既に相当数のアーカイブ作業をしており、LTOは作品のライフサイクルを支えるのに欠かせない存在となっている。

しかし一方で、収録したデータを利用したい場合の課題もある。井上氏は「コールドデータとして保存するにはいいのだが、扱うデータが概して大きくなっていることから、データを引き出して使う際に時間がかかることがある。今後、転送速度が向上すれば、より使いやすいメディアとなるのではないか。世代間の互換性も上がってほしい」と指摘している。

LTO特集

エクサインターナショナル

映像アーカイブを支援

LTOのサービス実施

エクサインターナショナルは、映像資産のアーカイブソリューションの提供に力を入れている。同サービスは、メーカーをはじめとした大手企業や団体、テレビ局、コンテンツホルダーなどへ、番組素材やCM、映像・音楽、コーポレート映像といったコンテンツのアーカイブ化と大容量映像ファイルの運用を支援している。

LTS-MAM㊧とLTOサーバー

SD、HD素材からHD、4Kへのリマスター、画質補正にも対応し、コンテンツの二次利用によるビジネス展開も積極的にサポートしている。同社提供の「LTOアーカイブサービス」は、このファイルアーカイブソリューションの一環で、もちろんアーカイブメディアとして、オプティカルディスクやHDD、クラウドアーカイブなど、ユーザーに合わせた選択も可能だ。旧世代からのマイグレーションへも対応。朋栄製LTOサーバー「LTS-7O」「同8O」でのアーカイブ化からシステム提供までサポートする。

アーカイブサービスでは、顧客から預かったメディアの整理・リスト化から、映像ファイル、メタデータ、プロキシファイル、サムネイル画像を生成し、アーカイブメディアに記録すると同時に管理用データベースを構築し新規のアーカイブ映像、進行中作品の国内・海外へ向けた高速ファイル転送による納品対応、番組販売運用をサポートしている。

クラウドでのオンライン共有へと展開できるよう、段階的なファイルアーカイブ化も提案している。